

生活斷片

森 南 岳

學校でH君から此處に何か書け云ふ命令を受けた、其の日例の通り××停留所から、歸途の電車に乗った。乃公の前には白襟黒紋附の正装の婆さん連が四五人席を占めて居た。六、七歳位の子供が一人随分ハイカラなスタイルの洋服を着て車中を飛び廻つて居る。電車が動き出した。其の子供が俄に頓驚な聲で「自動車!!」と叫び出した。車内の眼は一齊に彼に向けられた。婆さん連は「ワハ、、、」「ホホ、、、。」と笑ひ出した。其の少年は益々駄々をこねて口喧しく「自動車。」を連發してゐる。彼女達の中の一番若いのが子供をすかして「自動車に乗る代りに坊の欲しいもの、カバンもミツトも寫真機械も何でも何でも買ふてあげるから電車で辛抱しなさいね。」と靜かに云ふて聽かした。其れで彼は首を縦に振つて一時納得したらしかつた。暫らくするに、又車外には自動車が走つた。其の少年は先きよりも一層肝高い聲で「自動車がある。自動車がある!!。」と叫び出した。彼女達は「ワハ、、、。」と笑つて居る。車中の誰も彼もが濼い顔をし、或は背けた。彼女達の笑聲は其の駄々子を如何にも頼母しく思つてゐるに云ふよりも寧ろ誇りまして居るかの如くにしか聞えない。電車が二つか三つ目の停留所に來た時に六十も過ぎた位の婆さんが、みすほらしい姿で五つ位の女の子を連れて乗り込んだ。空席がなかつたので、其の婆さんだけは僕が立つた跡に腰掛けたが子供は婆の膝に倚つて大人しく立つて居た。先の少年は車内を聞えよがしに自動車をねだつて居る。

乃公は其の少年の横面をなぐり飛してやりたかつたが、否それよりも其の親達の面の皮に唾を吐きかけて、引きむいてやりたかつた。

然し××停留所まで来たら彼女達は遂々一人の駄々子に根負をして近くにタクシーの見たたのを幸に自動車に乗らうと大騒ぎをして降りた。其の跡の空席には向側に立つて居た先刻の少女が嬉しさうに腰掛けた。何と云ふ皮肉だらう。其の少女の嬉しそうな顔を見る事によつて暗涙を催せずには居られない。

是が世相だこ一概に片付ける事が出来やうか。頑是なき子供にまで不知不識の間に斯くまで懸隔を造りつゝあるこ云ふことは来るべき時代の階級闘争の萌をはばみつゝあるのではないか。

×

×

×

×

徹底なき愛の安賣の或女が或男への文に淋しい淋しい書いて遣つた。男は女が自分を慕うて居るのだと思つた。其うして女の淋しい心を慰むるには熱愛を彼女に注ぐより外はないと思ふやうになつた。彼女の淋しさを慰め救ふ積りであつた彼は遂には彼女によりて慰められ救はねばならぬ戀の虜となつた。

千代尼が夫に別れた折に「起きて見つけ寝て見つけ蚊帳の廣さかな。」と言ふ句を吟じたと言ふ事を聞いて誰かゞおきけまじりに「お千代さん蚊帳が廣げりやはいろうか。三吟じたそうである。淋しさを訴へると、此の淋しさを慰めやうとして愛情を催すものである、男が女に對して淋しい淋しい書く時には女の愛を求めて居るのである。女が男に對して淋しい書く時には男の愛を求めて居るのである。是は自覺しないで黙して居るのである。

又或不良少女の告白を聞けば、彼女等の第一の武器である色情關係に最も容易に誘惑し易いのは男が自分から自分は誘

惑されるやうな事は斷じてないから、餘り深入りせない程度に於いて自分から彼女を試みやう位に自任して引懸るのが一番易い彼女等の誘惑の對象である。と。尙、詳しく聞けば彼女等の云ふ所は堂々たる應用心理學の研究者の觀がある。

何れにしても徹底なき妙な愛の安賣者の落ち行く破目には人間生活の賤しき、恐ろしさが覗はれる。

×

×

×

×

犠牲と云ふ言葉は古臭い言葉であるかも知れないが、考へやうによつては眞の愛は犠牲と云ふ言葉の中にのみ認められることも言ふべきである。藝術の體驗も宗教的信念も此の二字の中から生れ出て來なければならぬ。

孔子の所謂惻隱の心や、又 *the sentiment* は例して曰く、勞働爭議の友情、孝行息子の親に對する感情、博愛なき、つきつめたる命懸の感情をすべて宗教的なり。と主張して居る。

犠牲と云ふ言葉はエゴの反對を意味するものである。人間が自ら犠牲的行爲と自覺し自任して居る間は犠牲とは言ひ得られない。三昧の境界は自己犠牲の上に始めて名けらるゝ言葉である。子供が玩具の弄戲其のものゝために自己を犠牲にして居る。然し彼等には勿論何等の自覺もない。斯く考ふれば、戰士の劍尖にもスポーツマンの一本のバットにも、時としては我々の食卓の箸先きにも宗教的態度が體驗され、藝術が表現されて居ることも考へられる。然し唯其れだけの事ならば三歳の童兒もよくする處である。吾人の生活は是を何等かの形に論理化し系統だてる事によつて眞の價値を發揮するものである。

×

×

×

×

浴場見聞。十歳位から十二三歳位までの少年が四人で湯槽の中で盛に口角泡を飛ばしてゐる。其處へ一人の若い男が入

つて来た。少年達の話は地理の話から歴史の物語りにまで移つて行つた。一人の少年は得意氣に楠公父子の崇拜論を述べ、「嗚呼忠臣楠子之墓」の石碑が神戸にあると云ふ。今まで何か云ひたそうに微笑して居た若者は「うゝゝそうだ。あれは三代將軍家光公が建てられたのだ。」と。少年達は一寸顔を見合した。然し其の中の一人が恐るゝ「あれは水戸光圀様だよ。」若者「それは違ふ三代將軍家光公だ」他の少年が「でも學校では先生から水戸光圀が書かれたのだ。ミ教はつたんだよ。」と云ふ。

若い男は「先生なんか本當の事を知らないのだ。」と。それから兒島高德は歴史的實在の人であらざる事をも説いて歴史の事は彼自ら何でも知つてゐるミ自稱して居た。今迄不服らしい顔をして居た少年達は全く感心して了つた。其の後は段々學校の先生の無能呼ばはりの中に話は濟んだ。

教ふるものゝ錯覺か。教へらるゝものゝ錯覺か。錯覺は錯覺としてすべての人に認定された時には錯覺であるミ言ふ事其のものが眞理である。錯覺が小賢しい理屈を以て解決された時に最も恐しい結果を將來するものである。現代人の所謂文化生活なるものは詭辯を以て縫はれた最も恐るべき錯覺ではあるまいか。

x

x

x

x

A. ミB. の對話

A 「ヤア、久振りだね、三日見ぬ間の櫻ミ言ふ事があるが母校の門を出てから僅かに四年足らずだが君はエライ立派な和尚様になつたね。此頃は何うして居るんかい。？」

B 「此頃は東奔西走、席の温るを知らず、てな有様さ。君は？」

A.「僕は相變らず親の脛嚙りだ。親ばかりぢやない六親眷族皆に迷惑を掛けての角帽暮しだ。」

B.「イヤ……結構だね。實際僕等のやうな貧弱な者にまで教化僧と言ふ名前を附けられて、有難いのか迷惑だか、何うも重荷だね。」

A.「君の話で思ひ出したがね、僕等の中學の時分に校長をして後に教擧部長の席に就いて間もなく逝去された〇〇先生が校長時代の教育方針を某新聞記者に話された記事を見たが、其の時先生は教化僧と勞働僧とを造り出す方針だったそうだ。僕は其の時から此の言葉に不思議な感じを持つて居たが、年を経るに随つて其の疑問が益々はつきりした疑問になつて來たがね。」

B.「何故？君等の宗派では其んな言葉はないのですか。僕等の方では勿論はつきり區別するわけではないが、兎に角、二つの名前があるわけですがね。」

A.「君等の宗派でも眞宗でも此の頃は流行肩書とでも言ふのが随分用ひられてゐるやうだね。では君、先づ勞働と教化と勞働僧と教化僧との定義を説明してくれないか。」

B.「相變らず六かしい皮肉を言ふね。何だか痛い所に鋭いメスを當てられるやうな氣がするね。其んなに定義とか條件とか言はれると困るが、勿論兩者の間が判然と區別されるか否かは疑問だね。先づ一言へば檀用讀經を事としてゐるものゝ布教傳道に従事するものとに區別した名稱に過ぎないさ。」

A.「其れだけの事か。何の事だい。餘り馬鹿氣で居るぢやないか。君の言はれるのは要するに、鐘を撞いて、葬式法事のする坊主が、勞働僧で、説教壇上に長廣舌？を振つて飛び廻る人達が教化僧と、言ふわけですね。」

B.「……………。彼は氣まづい顔をして何も言はない。」

A.「大體教化ミか勞働ミか言ふ語を今日の坊さん達の代名詞、否肩書にする言ふ事は餘りに勿體ない話ではないか。強ひてそんな名前を附けるならば寧ろ君達の所謂兩者を取替へて名附けた方が適當ではなからうか。考へて見給へ。身には綺羅錦繡を纏ふて、説教壇上に立つて祖師様ミ經典のブローカーをやつて御座る方々こそ勞働僧ではないか。否そんな人達に勞働の字を用ふるも勿體ない。オイ君一人を非難してゐるわけではないからそんなに怒るな。自分達の脚下は眞暗で、西方極樂淨土が何うして信ずる事が出来るものか。餘り安ほい所で勞働だの教化だのミ神聖な肩書を附けるよりも、木佛金佛を看板に智恩院や六條様の大舞臺で善男善女を集めて目の醒めるやうな芝居でもやつて呉れ給へ。それには都踊りをかつぎだすのも大いに面白いね。マア……折角精進し給へ。腹が立つたら一昨日來給ひさやうなら。」

B.「最う歸るのか？」

A.「あまりしやべると教化僧様から地獄行きの極印を頂いては助からないから。今日は失敬する。さやうなら。」

X

X

X

X

數の觀念。 洛北の或部落を通り掛かるミ、四五人の子供が電柱の傍にワイワイ騒いでゐる。彼等は電柱の上から工夫の截り落す針金の屑を喧嘩腰になつて拾つて居る。「オイ乃公は五チエン(錢)拾つた。」「乃公は八セエン拾つた。」彼等は一ツ、二ツ、ミ云ふ數へ方は知らないが一錢二錢ミ云ふ事だけを知つて居る。聞けば、此の數字は拾屋のオツさんが毎日何錢拾つたと言ふて話す事を聞き覺えたのだそである。彼等は十錢以上は知らない。「十錢ミ又一錢拾つた。」と云ふ

其れに對して他の子供が「今日はエライ儲かつたな。」と言ふ事を忘れない。是を以て彼等の家庭の生活と、推して捨屋さんの日常生活が知られるであらう。

翌日は野上先生の御指導によつて附屬小學校を參觀に行つた。第二時間目に尋常一年い組の算術の授業を參觀したが、生徒の智能の他の學校に勝れて居る事は尙更茲に書くを用しない。只生徒が暗算で錢の二桁の數を吾々も及ばぬ程の早さで解答するのには全く驚かされた。彼等の頭に數へられる十錢と、昨日の特殊部落の子供の頭に浮ぶ十錢との間には其の量においても質においても随分の懸隔がありはすまいか。勿論子供の年齢は一つ違ふか違はない位である。

吾々の生活價值は各自の主觀によりて異ると雖も其の主觀の作用は其の人の環境即ち客觀によつて支配さるゝものである事を知らなければならない。眞に吾々人類生活の價值は何を基本として認定すべきであらうか。